

東山彰良賞：「本からうけとる時の^{たて}経・文字のいろどる日々の^{いと}緯」 紗ふら

日本人の非識字者の割合は人口の約 0.2%であるとされている。

半世紀ほど前になる。私は物心ついた頃から病院の入退院を繰り返す、病弱な子供だった。

幼稚園、小学校と、思い出は教室より病院のベッドやそこから見える景色のほうにある。働いていた看護師さんと、その机で一晩中ぼんやりと病室をてらす蛍光灯のあたり。暗闇から藍色へ、うっすらと空を変えていく夜明けの色。

安全の為にされた子供用のベッドの柵は背の高さほどもあり、用事がすむと看護師さんは迷いなくガシャンと柵をあげ去っていく。

かかりつけは地元でも大きな病院で、親の面会も厳しく制限されていた。

一人で過ごし、一人で治療を受け、一人で食べて一人で眠る。家々の明かりがつく夕刻になると自宅の台所が思い出され、ただ泣くことしかできなかった。

少ない面会時間、母は多くの本を持ってきてくれた。

開くと、そこにはいつも生き生きとした世界があった。シートン動物記の伝書鳩アルノーやオオカミ王ロボ。フェアブル昆虫記や漫画サザエさん。

読んでいる間だけは、泣くことを忘れ夢中になれた。見届けて、母はそうっと帰っていく。

0.2%。母はどんなふうに私への本を選び、本の世界はどんなふうに感じられていたのだろう。

明朗で信念のある人。よく通る声で朗らかに笑う、正義感が強くちょっと厳しい母。複雑な生い立ちの中で、小さな働き手として、学校に碌に通うことができなかった。本を与えてくれる人などいなかっただろう。文字で表現する術を教えてくれる人も。

本を通じて、初めて私に読む楽しさと、文字を使って表現する豊かな世界を教えてくれたのは母だった。

与えられた良質の本たちはその文字の力で私を遠い世界へも連れ出してくれた。込められた思いは一筋の^{たていと}経のように。

生きる日々、文字を見つめ、書き、文字と語らい、気づかないうちにどれほど救われてきただろう。

あの時間に戻るなら、私が大きな声で本を読んであげるのに。